

---

# 或る料理番の一日

紙袋のえる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

或る料理番の一日

### 【コード】

N5389Z

### 【作者名】

紙袋のえる

### 【あらすじ】

エル・ドラード号、料理番の或る一日。が、穏やかに終わらなかつたお話。

(前書き)

作者が船の一日を把握したいが為に書いた物凄く不親切な書き散らしです。

世界と世界の間には、広い広い海がある。

その広い海に行く、大きな大きな船がある。

船の名前は“El Dorado”。

二人の神子を船長に、何れ狐になる器を料理番に、多数の『良き隣人』と化け物を乗組員に。

ガレオン船の姿をしたそれは、移動する“小さな世界”。

…これはそんな世界の、料理番の或る一日。

\*\*\*

早朝、甲板にて一步も譲らない気迫を持って対峙する一人と一羽。

「うおらああああああああああつ！！！」

「ゴオゲゴツゴオ」オ」オ」オ」オ」オ」オ」ツ！！！」

…船の一日は鶏と料理番の雄叫びから始まる。

およそ女子とは思えない料理番の声に重なって聞こえる鶏の声は、輪をかけて鶏とは思えない。百戦錬磨の傭兵のような鋭い目の鶏には右目に傷があり、どう括りつけているのか、その鼻の上には丸眼鏡。大きさは普通の鶏の二倍ほどで、トサカは大きく立派な朱色をしている。

異様な様子は料理番も負けず劣らずだ。大きな鉈を油断なく構える割烹着姿の少女。中肉中背で、個性のない整い方をした顔をしている。左目がちょっとばかり灰色がかっていること以外は普通に見えるボーイッシュな少女が、割烹着姿で鉈装備。アンバランスにも程

がある。

じりじりと距離を詰めたり離したりしながら、一人と一羽は互いに仕掛けるべき時を待っていた。そして

「哀、朝食は　　つて、あ、」

「うおらあああああああああつ！！！！！！」

「ゴオゲーッゴッゴッゴッゴッゴッ！！！！！！」

蒼の神子の声を切欠に、鶏に斬りかかる料理番・哀。

首を刎ねるべく真横に振った渾身の鉈をあるうことか嘴で受け止める鶏。

がいん！

ごっごっごっごっ！！

いいん！

ごっ！がづっ！！

びいんっ！

「……………」

およそ人間と鶏の攻防とは思えない音に、蒼の神子は呆然と立ち尽くしている。空より蒼い目を丸くして、ぽかんと口を開けていると、中性的で人形めいた美貌も形無しである。

鶏の激しい啄ばみによって生じた風が、蒼の神子の短めの黒髪を煽る。

……啄ばみを受けた鉈が歪んでいる。鉈の修理費を出すように、経理の水馬にそれとなく言っておこうと蒼の神子が思った時。

「はあああつ！！！！！！」

「ゴゲッ！？」

勝負は決した。料理番の鉈が見事に鶏の首を捉え、そのまま一直線に振りぬかれた鉈はいつそ小気味のよいぐしゅっという音を立てて鶏の首を刎ねた。

噴出した血液が鉈を、割烹着を、鶏の羽を汚す。

啄ばまれすぎて歪みに歪んだ鉈を放り出すと、伝って落ちる汗をぐいと拭って、料理番は甲板に倒れ込んだ。

「あゝ…しんど…」

「お疲れ様、哀」

「…おー…」

「…朝食のメニューを聞いても？」

「鶏肉と野菜のスープとサラダorほうれん草のおひたしとパン。

「ご飯…」

「毎朝ありがとう。急かして悪いんだけど、後始末とタリ様のお世話には僕がするから、哀は厨房に急いで貰えるかな」

「どうして」

「巴瑚が腹を空かせて待ってる」

蒼神子の言葉に、料理番は勢いよく立ち上がった。丁度手元に走ってきた鶏の首から下を引っ捕まえると、慌てた様子で厨房へ向かって走り去った。

『あやつも難儀しておるのう』

「あの子だけでしよう、この船で難儀しているのは」

『ほ、毎朝殺されているわしが難儀しておらんとでも？』

「タリ様は楽しんでいらっしやるでしょう」

『ほほ。ではお主は難儀しておらぬのか？あの悪魔のような神の子に振り回されておるじゃろう』

「…ご存知でしょう、僕が好きで難儀しているのだから」



そつけない料理番の返事に、話題を違えた、と蒼の神子は眉尻を下げる。

朝に弱い紅の神子・マリは昼を過ぎないと食事を取りに現れないし、蒼の神子・レイは昼過ぎから夜にかけては主に読書に熱中して部屋から出てこない。それ以外の乗組員も、夜行性であったり、気分が食べに来ないことはよくある。

船には料理番によつて常に何か料理が大量に拵えてあり、誰もがそれを食べたい時に食べている。船のどこかにいる料理番を見つけてリクエストすれば、作れるものならば作って出してくれる。人間に化けられる者は、厨房に入って自分で料理を作ることと許されている。こういつた訳で、皆が決まった時間に食堂に集まることはほぼ無いに等しい。

さて、しかし、そういう事実があるにせよ、そんなにそつけない返事をしなくても、とも蒼の神子は思う。…しかしながら哀はこの場の空気を『あえて読まない』選択をしているため、蒼の神子の意図を汲み取ることもあえてしなかった。奴の怒りの矛先が此方に向かうのはごめんだ、と目が語っている。

…蒼の神子は溜息を吐く。

「…ウオ口、そんな不機嫌そつに食べてると空気が悪くなるのだけど」

「申し訳御座いません、レイ様。しかし…この不快な音が」

「ひひゃふあぶあぶえくえひよ」

「……………」

「飲み込んでから喋れよはっちゃん」

「ひゃい」

「……………」

水馬の眉間の皺がひとつ増える。

蒼の神子の眉尻が更に下がる。



料理番の目が輝きを失う。

そして、化け物がにこにこしながら口を開く。

「嫌なら出てけよアホ馬ちゃん。“一緒に食べよ”だなんて誰も言  
つてないよ？」

「……………」

水馬が黙って剣を抜く。

料理番が黙って料理を下げる。

蒼の神子が青褪めて言葉を失う。

そして、化け物がゆらりとその影を揺らす。

清浄な水の気配と濃厚な闇の気配がぶつかり合い、なんとも言えない居心地の悪さが生まれた。闇色の粘土を不器用に捏ね上げて作ったような不恰好で巨大な腕が水馬を上から叩き潰そうと振りかぶられ、それを美しい水晶の剣が切り裂く。生じた風圧と水飛沫でテールブルクロスはぐしゃぐしゃになり、間髪助かった料理を運んで奥に引っ込もうとする料理番の背はびしょ濡れになった。蒼の神子は慌てて料理番を手伝いながら、一緒に奥へと引っ込む。

「…どうしよう、あれ」

「ほっとけ、いつものことだ。」

「そんなことより、あったかいうちに食べちゃおうぜ」

「…いいのかなあ…」

厨房に椅子を準備して、朝食は再会される。

\*\*\*

料理番が自分の昼食を作り終える頃には、食堂はすっかり元通りに

なっていた。化け物対水馬の激しい戦いが行われたとは思えない。恐らくは船に住み着くブラウニーかキキーモラか、はたまた別の妖怪かが、綺麗さっぱり片付けたのだろう。熱いラーメンを啜りながら、礼に置いておく菓子を何にするか考えていると

「美味しそうねえ」

「…扉から入ってこい、扉から。」

気付かぬうちに其処にいたのは、人形めいた美貌の愛らしい幼女だ。内巻きボブの銀色の髪に鳩血色の眸。くすくすと笑う声は鈴が転がるよう。とろりと蕩けるような笑みを浮かべた彼女は、小さな体に合わない大人用のナイトウェアを着てちょこんと料理番の横に腰掛けている。…かと思えば、瞬きの間に女性と呼べるほどの大きさになって、優雅に足を組んで座っている。

相も変わらずじっとしていられない奴だと、料理番は忌々しげに眉間に皺を寄せた。

彼女こそが紅の神子・マリ。天使のような姿をした、悪魔のような神の子だ。

「わたしも食べたいわ」

「自分で作れよ」

「チャーシュー麺がいいなあ」

「……………」

「……………」

料理番は急いで麺を啜り上げた。上機嫌ににこにこしている神子の目はきらきらしていて、こつこつ時の彼女は、『腹を裂いたら麺が出てくるかしら』などと無邪気に考えているに違いないのだ。そしてそれを実際試そうとするから恐ろしい。

“狐面”が手元にあつたなら先手を打って殺す事も出来ただろうが、生憎部屋に置きっぱなしだ。素直に従ったほうがいいと料理番は判断した。血を介して命を共有している二人の神子が生きている限り料理番が死ぬことはないが、それでも腹を裂かれれば痛いのだ。

「チャーシューは5枚ぐらい入れて欲しいな」

「多すぎだろ…折角内緒で作ったのに」

「うふふ。わたしに隠し事なんて出来ないこと、知っているくせに！」

「……………はあ。」

大きな溜息をひとつ吐いて、料理番は厨房へ入っていく。

\*\*\*

「この後、ダンスパーティーに行きましょう。」

「……………」

紅の神子の一言に、蒼の神子と料理番は夕食のグラタンをつつく手を止めた。二人とも、心の底から嫌そうな顔をしている。化け物だけがほがらかにもごもごと口を動かしながら、「ふおへっへふあふあひふおひふほ？」と紅の神子に問いかけた。にこにこしながら頷く紅の神子。

「勿論、皆で行くのよ。“実”を収穫するのに人手がいるかもしれないの」

…その言葉に、嫌そうな色を帯びていた二人の目に真面目な光が差す。

「…てことは、今回はちゃんとした“実”になる蒐集なんだな」  
「あら、思いつきだとも思ったの？」  
「残念ながらまったくもってその通りだよ…」  
「やあね、心外だわ！わたしが二人が嫌がりそうなことをするわけがないじゃない！」  
「……………」

蒼の神子と料理番は、嘘だ！という叫び声を飲み込んだ。

「どんな物語なんだ」  
「女伯爵と怪盗の華麗なる恋のお話」  
「…それ本当に“実”になるのか？」  
「違うないわ」  
「……………」

胡散臭そうだと表情を歪めた料理番が蒼の神子を振り返ると、既に蒼の神子は分厚い本を開いて頁を捲っていた。蒼い背表紙のこの本は、神子が関わる物語の冒頭とあらずじを予知して浮かび上がらせる。

…そして、特にすばらしい物語が集まると、神子の成長に必要な“実”となる。神子の旅の目的は、本に物語を蒐集し、成った“実”を食べ、立派な神様になること。…ということになっている。建前の上では。

料理番はその手伝いをしなければならぬ。それがこの船に、化け物と 巴瑚と一緒に乗っているための条件だ。“実”をつける為に必要な物語を蒐集する時には、嫌でも一緒に行かなければならない。

「……………、うん、間違いないね。これを蒐集すればマリの“実”が

結ぶだろう」

「…じゃ、仕方ないか。…でも、あたしゃドレスなんか着ないからな」

「右に同じく」

「レイは男装して、哀は男の子に“なつて”行けばいいわ」

「…え？」

「…声をそろえて意外そうに首を傾げるのはやめて頂戴な。ダンスのパートナーが必要でしょう？それでよ。わたしは二人にもドレスを着て欲しいわ」

「悲しくもないのに本気で悲しそうな顔すんのやめる」

「悔しそうな顔をすればいいのかしら？」

「……………」

閉口して眉間に皺を寄せる料理番の肩をぽんと叩く蒼の神子。

溜息と共に頷くと、料理番は冷めかけのグラタンを掬って呟いた。

「…まだ石あつたっけなあ…。」

\*\*\*

タキシード姿の青年が、ぷかりと青い煙を口から吐き出した。その煙からは不思議と香りがしない。傍らに置いた細工の見事な水煙管が、ちかり、ちかりと怪しく青く瞬いている。

元々、ちよつとばかりし妖怪と仲がいいだけのただの人間であったはずの料理番だが、いずれ狐になる器であると予言されてから、都合よく怪しい道具が手元に集まるようになった。この水煙管もそのひとつだ。鉱石やら寶石やらを入れると、吐き出す煙で妖術を使う事が出来る。特に“化ける”力に秀でた妖術で、肉体の性別を変える程度のことは造作もない。

…しかし我ながら着実に人間の道を踏み外している、と料理番は溜

息を吐く。そうでもしなければ、この船には乗ってられないのだが。

「準備できたわね」

「ん。…巴瑚とレイは？」

「先に行かせたわ」

「…え、俺がお前のパートナーになんの？」

「嫌なのかしら？」

「嫌だ。」

「うふふ。知ってる！」

「……………、後で殺してやる。」

「有難う！」

紅の神子がひどく純粹な笑顔で手を差し出す。

料理番は思い切り顔を顰めてその手を取る。

握り潰さんばかりの強さで握られた手を見る紅の神子の目はきらきら輝いていて、

「さあ、しっかりエスコートして頂戴ね！」

「……………」

…これだからこいつは嫌いなんだ、と、本日何度目かの溜息を吐き、手を引いて、扉を潜った。

\*\*\*

…こうして、料理番の或る一日は終わる。

この日の0時を過ぎてからの、マリの“実”となる物語は  また  別の話だ。



(後書き)

読み返してみると、タリ様と哀の攻防が書きたかったただけなんじゃないかとすら思えてくる話ですね(遠い目)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5389z/>

---

或る料理番の一日

2011年12月18日02時51分発行